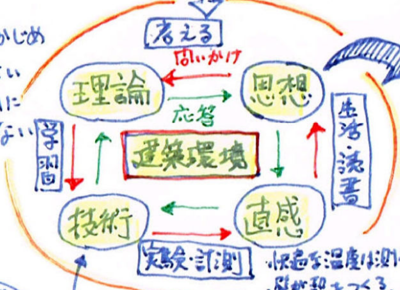
2023年 **行動指針**

エコロジカルな言葉と思考をもとに
遊ぶように生き、遊ぶようにつくる

考えること

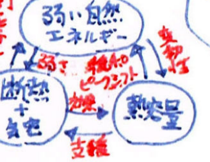
① 環境という言葉に対し、足場となるような自分の言葉をみつけ、思想、理論、技術、直感のサイクルをまわす。

② これまで考えてきたことと環境に対する考え方の接点を見出し、統合する



- 答えをあらかじめ用意しない
- 数値ゲームに囚われない

- 快適な温度は測れない
- 壁が熱をつくる。
- 閉鎖系への違和感



理論と技術へ

- 温熱環境をどう考えるかは、資本主義の物語に対してどうふるまうか、もしくはエコロジカルであるとはどういうことか、という思想によって決まる。

環境問題は「省エネ」といった技術の問題というよりは、「自然とのエコロジカルな関係性」を築けるか、という想像力の問題である。

オルタナティブ

デカルト的二元論からアニミズム的存在論へ

- 問題意識を欠いた単なる「省エネ」は成長の穴を部分的に埋めることにしかならない。
- 環境工学を目的化する思考は、二元論による自然制御というロジックを温存する。
- 環境問題は存在論と想像力の問題である。
- 近代的分断の世界観に対する反省を伴わない思想・技術は、問題への根本的対処になり得ない

近代的限界性

資本主義から考える ホッブス・ルソー・ヘーゲル

- 市民社会と資本主義だけが普遍闘争や専制支配を退け、人類に自由をもたらすことのできる唯一の原理であるが、

実際には、格差を拡大しながら、地球環境の時間的限界に向けて突き進んでいる

↑ スケール則による限界

ポストモダンが大きな物語を終わらせたが、人類はもう一度大きな物語を描かなくてはならない。
それは、理想理念・イデオロギーとしての物語ではなく、人々を「人類」という連帯の輪に結びつける物語、合意による新たな「正当性」確立の物語である

次のテーマ

資本主義に対し、その中で個人としてどうふるまうべきか。その足場となる言葉を探すこと

「生活のスケールを超えた想像力の獲得」を指標とすることで、様々な価値判断が可能となる

「閉鎖系モデル」↔「開放系モデル」
「欠点対応型技術」↔「良さ発見型技術」
「強い力」↔「弱い力」
「適」↔「快」
これらを想像力の問題として捉えなおす

- 強さに依存せずに弱さにとどまることなしには、持続可能な世界に近づくことはできない

良さ発見 弱い力

エクセルギー

エクセルギー：資源性
エントロピー：排出すべきゴミ

「資源性」は至るところに発見できる。その流れ・循環を無理せず、途切れさせないように、少し道筋を変えることで目的を達成する。

- 構造〈かたち〉から機能〈かた〉はたらきへ。

はたらきのデザインに
エクセルギーの概念から学んだ
流れと循環のイメージを加える

サイクル・はたらき

弱さには哲学が必要

個性

楕円モデルと名づけ

A−非Aの重なり
統合（インテグレート）

物そのものを建築と呼べる瞬間

コンセプト ⇄「条件」→「形」
形式 ……「形」→「条件」 サイクルをまわす

名づけ → 遊び 切断から重なりへ。

尺度
サイズ ……… 対象のスケール
プロポーション …… 関係のスケール

かたち
かたち ……… 形態を示す言葉
非かたち …… 思考を示す言葉

空間 …… ところ−ところ
場所 …… ところ−非ところ

名づけが所有の概念に隙間を与える

環境について ↔ 接点・統合 ↔ これまで考えたこと

これまで考えてきたこととの接点を考える

原点 神戸児童殺傷事件や子どものころに感じていた違和感

⇩

- “ニュータウン的な環境に対する違和感”に対し、どう向き合えば良いか。人が人らしく生きられる環境とはどういうものか。

⇩

ニュータウン …平穏で透明で無摩擦の停止した世界で個人が現実感を失っていく。様々な欠如。

ここから未来を考える ↓ 内面性とは異なる視点

ニュータウンの現実感のなさは、内面性とその環境の貧しさ、ではなく、運動性の不在による。

⇩

表現の貧困化

思考停止は内面的な問題ではなく、外的な世界の運動性と空間性の欠如の問題と言える。

└→ 対抗するには運動性の強化、表現を豊かにする。

- ニュータウンの時間は停止した時間とその背後でひっそりと動いている時間の2つがある。

計画者や消費者の中にある豊かさの概念を書き換えない限り、後者の時間はあっさりと消し去られる。

└→ この時間を維持するには専門知が必要

これまで見捨てられてきたもの、そこにある“小さくて脆いもの”の存在とはたらきを見出し、活かすための知性

└→ ここから未来を考える。可能性

「生きられた家」も同様に豊かさを古民家の豊穣さではないものに見ようとする

共通の違和感
ニュータウンと閉鎖系モデルの共通点。

閉鎖系モデル 周囲の環境から分断させ完結させるという思考による運動性の不在、停止した世界

- 境界を閉じ、最適化を目指すことは快適性を最大化すると同時に運動性、公共性、空間性あるいは未来を放棄し世界を停止させようとすることである

良さ発見型・想像力

「生きられた家」21世紀の民家

- 構造ではなく、どのように立ち上がるかというシステムの問題で、言葉や技術が媒体となる。
- 主体が経験や象徴とともに生成する

民家とは
- 「家」とそれが現実化する文脈との均衡した構造を持つもの。
- 住むことと建てることが同一化する構造を持つもの。

建てることのプロセスが隠れずに、確かなリアリティとともにあった

⇩

家を現実化する文脈を書きかえるための目と手を養い、解像度を上げる。

⇩

知覚・技術・環境のダイナミックな関係性とサイクル

- 越境社と演劇性。
- 装置から身体性を伴う道具へ

発見するか

アフォーダンス

生成・はたらき

はたらき

オートポイエーシス

生気の躍動感

2023年指針

生命システム

心という発見 → システム・OS → はたらき → 生命

現代的課題 世界とつながるための身体性と技術の不在化

↓

遊びの不在化

↓

意識 → 生命
分断 → つながり
構造 → はたらき
の流れを逆行させる。

分断と不安

「拡散」と「集中」の歴史

不安の解消ではなく生命の躍動感の方に賭けてみる。

→ 世界とつながるための身体性と技術を遊びとしてパッケージし建築に埋め込む

「意味のない無意味」有限化

抽象的概念 ⇄ 具体的事象

「意味がない無意味」 − 穴をふさぎ有限性を身にまとうための石

遊び ある部分での解像度を高めつつ世界とのキャッチボールをしながら探索と行為のサイクルをまわすこと

- 関係性や多様なものに開くためにいかに有限化し向き合うか。
- 〈必然〉や〈使命〉に還元せずに、本気で遊び解像度を高めることが建築につながる

はたらきのサイクル

アフォーダンス

オートポイエーシス システム

オノマトペ、ふるまい、複合というコンセプト
ネットワーク、ハイパーサイクル、少年のモード
レトリック、内在化と逸脱、ニューカラーとブレッソン
間合いとリズム、アンビエント詩学、距離の作法
遊びと自立

2024年も引き続き
遊ぶように生き、遊ぶようにつくる
その実践に重きを置く。

2023年まとめ 2024.1.4